
鴉は紅く、黄昏を待つ

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴉は紅く、黄昏を待つ

【Nコード】

N9782J

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

唐沢村は八田の田舎。

中止になりかけた旅行に無理やりに誘ったのは加藤。

八田の兄が美形だったことは神谷さんには僥倖だったろう。

そして、僕はカラスが嫌いになった。

ブローグ

誰かの視線を感じた。

けれども振り返っても誰もいない。

「ねえ、どうしたの？」

キヨロキヨロとする隣にいた彼女が僕の心配をする。

「いや、何でもない」

そう、何でもないはずだ。

そうやって心に言い聞かせて僕らは街中に行く。

ふいにカアツと鳴き声が聞こえた。

カラスだ。

何処にでもいるようなカラス。

けれども僕はその鳴き声に背筋に寒いものが走る。

僕は体を抱え、震えていた。

「ねえ、本当に大丈夫？体調悪いの？」

「ああ、もしかしたら少し風邪をひいたかもね」

そんな僕の嘘を彼女は真に受けて、今日の献立の提案をしてくれている。

奴らの視線に気づかずに。

街路樹に止まっている黒い塊は確かな意思をもってそこにいる。

僕達を監視している。

それは被害妄想じみているのかもしれない。

けれど、そう思わずにはいられないだけの経験を僕はしている。

「ねえ、鍋とかよくない？栄養がいっぱい取れて、風邪によさそう
な気がするし」

「そうだね」

僕は木の上のカラスを睨みつける。

その視線に気付いたのか、

「何？カラス見てるの？昂司って鳥好きだったけ？」

「いや、大っ嫌いだ」

僕はカラスに投げつけるように言い放つ。

そんな様子がおかしいのか、彼女はくすりと笑うのだった。

一章 「唐沢村へ」 - 1 -

その日、僕達四人は車に乗って唐沢村からさわむらと言う所へ向かっていた。大学のサークル仲間と企画していたこの旅行は、結局不況のありを受け、集まったのは四人だけ。

今頃他のメンバーは就活で飛びまわっていることだろう。

「もう少し何かあっただろう」

助手席に乗る僕の後ろから声がかかった。

「ん？何が？」

「BGM。こんな陰気な曲じゃなくって、もっと陽気な感じのがあったらって言いたい訳だ」

後ろの席にいた加藤拓也かとうたくやは僕の持ってきたドライブ用のCDが気に入らなかったようだ。

そもそも四人しか集まらなかった時点でこの旅行の話は無くなるはずだった。

けれどもこの加藤が我を通したせいで我々が付き合わされていると言っても過言ではない。

少しはそのことを分かっていればそんな不満は出てこないと思うのだが。

加藤の様子を見るに、そんな期待を持つのは無駄と思わざるを得ない。

「クラシックの何が悪い。そもそもだな。テンポのいい曲をBGMにして運転すると自然とスピードが上がって危ないんだ。だから、こういう大人しいめの方がいいんだ」

「はあ、すみませんね。学がなくて」

ふてくされた様な加藤。

全く子供のような奴だと思う。

加藤は僕との会話をあきらめたように今度は運転している八田俊はったしゅん佑すけに声をかける。

「でもよー。八田も名取の趣味悪いと思うだろ？」

「さあ？僕は車運転する時、いつもは何もかけないから」

八田はいつも通り気の無い返事を加藤に返す。

無愛想と言う訳でもないのだが、感情がこもってないことが明らかである。

とは言え、八田に関しては普段からそうなので、別段不機嫌と言う訳でもなさそうだ。

それもそうかもしれない。

八田にとっては久しぶりの帰郷である。

八田の頭の中では僕らのことなど除外され、他の事が巡っているのかもしれない。

「ああー、なんか面白くねえ」

昨今感情表現が苦手な人間が多いと聞く、その点この加藤は実に素直に感情表現をする。

不満はそのまま僕の顔の両側に現れた足として現れる。

加藤の大きく臭い足が顔の真横にあるのである。

まったく以って、不愉快極まりない。

どうしたものかと少し悩んで、僕は吸っていたタバコをその足に当てる。

「熱ッ」

すぐに足は引っこ込み、僕の作戦は大成功する。

「ああ、ごめん。こんなところに足があるとは思わなくて」

「お前なー！」

「止めなよ。せっかくの旅行なんだから。もっと楽しくしようよ。ね？」

一触即発の僕等を止めたのは加藤の隣にいた神谷良子^{かみやりようこ}だった。紅一点と言えば聞こえがいいが、完全に彼女も被害者だ。

加藤は僕の座席を殴り、僕はガクリと揺れる。

僕は加藤を見咎めるが、加藤は視線を合わせようとしない。ため息一つ、車内は沈黙する。

会話なく進む車の中で神谷さんのせき込む音が聞こえる。

『ああ、それでこいつは』と合点いく。

きつと神谷さんは僕のタバコの煙のせいで苦しんでいるのだろう。その事に気付いた加藤は僕に絡んできた。

音楽のことを言ってきたのは、タバコの事を直接言つと加藤が神谷さんに気を使っている事を気取られてしまうからであろう。

最も余計に気を遣わせているので、浅慮としか言えないが。

意外だが、加藤は粗暴だがフェミニストだ。

女性には変に気を使うが、同性の扱いは雑そのものだ。

何度加藤に殴られたことか。

加藤本人はじゃれ合っていると思っているようだが、男の全部が加藤のように頑丈にできている訳ではないのだ。

けれども『僕にも優しくしてよ』などとは口が裂けても言えないので、その横暴を許容するしかない。

僕は窓の外に煙を吐き、タバコの火を消す。

CDを止め、カーラジオのチューニングをいじる。

それから車は進み、灰色の味気ない景色を下り、街から町へ、やがて町を構成する家々も少なくなっていき、景色は木々の緑が席卷する。

「もうすぐ着くよ」

ラジオのDJが頑張って喋っているだけで、取り立てて会話の無かった車内に八田の声が響く。

やっとか、と少し体をよじる。

「何だかのどかな所だね。八田君の田舎って」

「ああ、まあね。でも、田舎ってどこに行ってもこんなものだと思うけれど」

「僕は田舎が無いから素直にこんな風景がうらやましいと思うけど」

「そう？ 何にもないよ。ただ自然が多いだけで、他には何も無い。」

そんなところが良いなんて名取さん、変わってるね」

ハンドルを握ったまま澄ました顔でそんな事を言う八田。

何だね、八田君、それは嫌味かね？

そうだとしたら心外だ。

僕はいたって普通だ。

「良いじゃねえか。自然さえあれば。畑で野菜植えて、川で魚釣って、たまにバーベキューなんてしたりして。最高じゃねえかよ」

加藤の馬鹿発言に八田は軽く笑み、

「そうだね。もし僕がお金に余裕があつて、そんな風に気ままに暮らせるなら最高かもね。けれど、実際作物を育ててお金を稼ぐってのは思ったよりも大変なんだよ」

と返す。

「ほら、そことか見てごらん」

八田がよこした視線の先には雑草がぼうぼうに生えた土地があった。

「昔はそこも田んぼだったけど、もう放棄地になってしまっている」
「減反って奴か？」

「それもあるけど、米を作っても儲からないってのもある。それと作る人の不足」

八田の言葉は依然として抑揚のない話し方だった。

けれど故郷について、いや、未来について語る八田の言葉はどうか熱を帯びているようにも感じとれた。

これから家を継いで農業やる八田にとって、今の現状はどう映っているのだろうか。

「農業や介護の人手不足が言われているけれど、一向に改善されないのは農業は皆が思っているよりも大変で、その上儲からないから国の根幹を支えているっていうプライドだけだと、ね。もちろん農業やって儲かっているところだってある。要は儲かるシステムをいかに作るかってことが問題なんだと思う」

「何か八田って真面目だよな」

加藤は興味無さそうに相槌を打つ。

「そうでもないよ。口では偉そうなことと言って、結局僕は何もできないと思う。こうしたら絶対儲かるって言って、他の人を先導して損益だしたら、それこそただの詐欺だし。僕は口先だけの理想論者だよ」

それは八田だけに限ったことではないだろう。

かく言う、僕もそうかもしれないのだから。

現状を何とかしたいと思いながらも何もできず、やきもきしている人間が世の中に何と多いことが。

早くから準備をして、僕は職を得たが、その先の事となると混沌としてまるで見えてきやしない。

神谷さんだつて親類のつてを頼って何とかもぐりこんだと言つても良いようなものだ。

ただ加藤だけが、何故だか分からないが、本当に何故だか分からないが結構有名な企業の内定をもらっていた。

しかも一発目の企業だったらしい。

悪いことではない。

仲間の朗報を喜ぶべきだろう。

だが、一方でやるせなさがあるのも事実だ。

出来る事なら加藤を採用した人にあつて、話を聞いてみたいものだ。

別に加藤が悪い訳ではない。

問題なのは僕が抱いてきた価値観との隔たりを感じたからだ。

一時は僕はこの世界に必要とされていないんじゃないかってさえ思えた。

就職先がやつと決まつて、ようやく気付く。

自分で自分の道を閉ざしていた事を。

「ねえ、あの木。すごいね。あの木一本だけ特別扱いされている感じ。この辺りの御神木みたいなのかな？」

僕の重苦しい思考を絶つてくれたのは、神谷さんの言葉だった。

その言葉が指していた木は、低い山の頂にあつた。

その木の周りの木々は切られ、ぽつりとそこに存在する。

非常に大きな木で、あれほどになると樹齢何年ほどになるだろう？

「ああ、あの木は・・・木だね」

「そのままじゃないか」

刹那、加藤が突然嘖き出す。

その大きな笑い声に僕はキョトンとして加藤を見つめた。

神谷さんも不思議そうに見つめている。

「はっはっはっ・・・八田、お前本当は結構面白いんだな」

「そう？そんな事初めて言われたけど。多分加藤さんは他人と感性が違うんだね。へえ、新しい発見。加藤さんも変わった人だったんだ」

おい、待て、八田。

『も』つて、僕と加藤を同列に扱う気が。不愉快だ。

早急に前言を撤回して欲しい。

「ああ、もう僕の家見えてきた。その右手側に見える家がそうだよ」
古風な日本家屋である。

けれど、その大きさは一体何坪あるのだろうか？
もしかして八田って金持ちなのか？

「おい、八田。お前の家、金持ちなのか？」

言いくい事を加藤がずけずけと八田に聞く。
良くやった加藤。

「そんな事無いよ。まあ、田舎だからね。土地も安いし、あれぐらの家、珍しくないよ」

そんな事はないだろう。

何でもかんでも田舎で片づけるな、八田。

そして、僕らは八田の実家にお世話になる事となった。

二章 「八田の家」 - 1 -

「お帰りなさい、俊佑」

「お帰りなさいませ、俊佑坊ちゃま」

出迎えてくれたのは、和装の品の良い女性と笑いじわをたたえた好々爺と呼ぶべき人物であった。

「ただいま、母さん。桐嶋さんも元気そうで」

「ええ、お陰様で」

僕は呆けてその光景を見ていた。

久しぶりの家族の再会を邪魔してはいけないといったものではない。

ただ自分が実家に帰った時の事を思い出して、文化の違いに打ちのめされていた。

押し並べて他人の家の文化と言うものは違和感を感じずにはいられないが、その中でも八田家は群を抜いている。

恐るべし、八田家である。

「それよりも俊佑坊ちゃまはお車の運転でお疲れでしょう。早々にお部屋にご案内しますので。皆様もどうぞご自分の家だと思つてゆるりとしてください。では、お荷物を持ちます故」

桐嶋老人はしわを作った原因の笑顔を浮かべ、こちらに手を差し伸べる。

「いえ、僕は自分で持ちますので」

さすがに老人に荷物を渡す訳にはいかないだろう。

こんな僕だが敬老の精神ぐらいは持ち合わせている。

「では、そちらのお嬢様は？」

神谷さんはチラリと隣を見る。

もう既に神谷さんの荷物は加藤がすべて持っている。

「そうですか。では、お部屋にご案内します」

そして、僕らがおずおずとついていこうとすると八田の母親の後

るの戸が開いた。

現れたのは、またも和装の人物。

整った顔立ち、透き通るほどの白い肌、肩口まで伸びている艶のある黒髪。

着物の上からでも分かる細い四肢。

「兄さん」

八田がそう口にしなれば、僕はきっと彼を女性だと思っただろう。

「何だ。来ていたのか」

八田の兄はそっけなく弟に言葉を返すと、僕達を見回した。

その双眸には魔力があるように、僕の心臓を高鳴らせる。

男だと分かっているとしても、その美しさに艶めいたものを感じずにはられない。

僕は息をのみながら彼の視線に耐えていると、彼は眉間にしわを寄せた。

それから八田の兄は何も言わず、ピシヤリと戸を閉めた。

「こら、冬馬。ちゃんとお客さんにご挨拶なさい」

八田の母親が閉まった戸に向かって話しかける。

返事は無い。

「ごめんなさいね。気を悪くしないでください。あの子、少し恥ずかしがりやなもので」

そう言って、八田の母親は柔和な笑顔を僕らに向けてくれている。そうなのだろうか。

恥ずかしがり屋があんな威風堂々とした雰囲気を出せるだろうか。

むしろ恥ずかしがっていると言うよりも、もっと、こう何か汚い虫でも見るような目だった。

八田の話では僕らが旅行先を八田の実家にした事を喜んでいたと言う事だったけれど、どうやら家族の全てがそうではないらしい。

きっと八田の兄にとって僕らは招かれざる客なのだろう。

そんな事を思いながら、僕等は桐嶋老人の案内のもと、一つの大広間に導かれた。

「なあ、俊佑坊ちゃん。この部屋、四人じゃ広すぎないか？」

「坊ちゃんは止めてくださいよ、名取さん。桐嶋さんはそんなじやないですから。僕の母親は生まれつき体が弱くて、それで桐嶋さんには僕が幼いころからお世話になっていたんです。その頃呼び方がそのまま残っているだけです。桐嶋さんはいわばヘルパーさんみたいなものです」

いや、ヘルパーじゃなくてバトラーの間違いだろう。

これで八田が桐嶋老人を『じい』と呼んでいれば完璧なのだが。

とお茶を入れますと部屋を後にした桐嶋老人の事を思う。

「部屋に関しては他に就職決まったメンバーが増えるかもしれないと思っていましたので、少し広めの部屋をと頼んでいましたから、そのせいですね」

まあ、世俗を忘れて田舎でのんびりやろうという企画なのだから、こんな広い部屋でゆっくりするのも悪くは無い。

「このほかに部屋は用意していないのか？」

二章 「八田の家」 - 2 -

加藤がしかめ面で八田に問う。

「一体この部屋の何処に不満があるのだろうと思ったが、すぐにそうではないと分かる。」

「ようは部屋自体の問題ではなく、

「神谷さんに他の部屋を用意してあげないと。こんな野獣達と一緒に寝る訳にはいいねえだろ」

加藤、お前って奴は。

「この中で一番野獣みたいなのに。」

「いつもならなんで僕が野獣なんだと突っ込みたくなるが、ここまで来るといつそ清々しさまで感じる。」

「そう？僕は神谷さんさえよければ一緒に寝たいけど」

「え？あ、私は・・・」

「八田！」

「分かってる。ちゃんと部屋は用意するよ。少し残念だけど」

「と八田はおどけて、神谷さんに肩をすくめて見せる。」

「それから桐嶋老人がお茶とお茶菓子を用意してくれて、一息入れた。」

「その折、部屋の事を言うと快く引き受けてくれた。」

「それにしてもよお」

「と加藤はバリバリと煎餅をかじりながら、

「あの八田の兄貴、なんかいけすかねえな。俺の事じろじろ睨んできやがるし」

「不満を漏らす。」

「いや、見ていたのはお前だけじゃないから。」

「加藤の自意識過剰であろう。」

「そうかな？八田君のお兄さん、すごくきれいで、私見つめられるだけですごくドキドキしたけど」

「もしかして神谷さんって意外とミーハー？」

「そ、そんな事無いよ。女の子だったら普通の反応だって。皆だって八田君のお兄さんが女の人だったら、多分おんなじ反応するよ」

確かに、もし彼が女性だと考えると・・・

「ああ、まあ、そうかもな。俺も見とれるかもしれねえな」

「何？加藤はああいう男が好みなわけ？道理で女に興味が無い訳だ」

「そうなんだ。加藤さん、兄さんと結婚する時は僕を式に呼ばないでね。お願いだから」

「ち、違う！俺はそんな意味で言ったんじゃない！」

顔を真っ赤にして弁明する加藤が面白かったのか、神谷さんもくすくす笑っていた。

思えば、今日初めて神谷さんの笑顔を見た気がする。

加藤ではないが、やはり女性には笑顔が似合う。

初めは乗り気でなかった旅行も、こうして普段見られない一面が見えると言った旅行ならではの事を発見すると、存外この旅行も悪くないような気もしてくるから不思議だ。

ただこの旅行が終わるまでに加藤には手加減と言うものを教えなければいけない。

恥ずかしいのか何なのか知らないが、叩かれた背中が痛くて仕様が無い。

きつとあざになって残るだろう。

「じゃあ、そろそろこの辺案内してくれよ、八田」

「えっと。僕、ここまで車運転して来て少し疲れてるんだけど」

「そんなの知るかよ。さっさと行くぞ」

「名取さんは？」

僕まで道連れにして欲しくない。

僕は丁重に断る。

「嫌だ。行きたくない」

「まあ、そうですね。じゃあ、神谷さんは？」

「わ、私は・・・」

どうすればいいと助けを求めて、こちらを見る神谷さん。

けれど、僕にはどうする事も出来ないので、巻き込まれないよう視線を外す。

すかさず加藤が助け船を出す。

「だめだ。神谷さんは疲れているから今日は俺らだけだ」

「僕も疲れているんだけど・・・ずるいなあ」

暴君と哀れな殉教者を見送り、僕は広い部屋の中央に寝転がる。程なく桐嶋老人が現れ、お部屋の用意ができましたと神谷さんを連れ去った。

一人きりになった空間にゆったりとした静かな時間が流れる。

何も無いと八田は言っていたが、そこには何も無いがあった。

情報や物質があふれかえる生活よりも、こうした何も無い中に入っていくと、自分の存在感が際立つ。

普通に生活していても味わえない感覚である。

少々感傷的になってしまふのが玉に傷だが。

それから時間は過ぎ、八田が帰ってきたのは夕方。

そこに加藤の姿は無かった。

「加藤は？」

そう僕が聞くと、八田は口ごもる。

何かあったのであろう。

八田の顔は蒼白だった。

三章 「カラスの止まり木」 - 1 -

「熊じゃなくて？」

僕の反応はこうだった。

八田の話では加藤はカラスに襲われたらしい。

全く、どうせ加藤がいらぬちよっかいを出したのだろう。

世話の焼ける奴だ。

どうせならそのまま山の中に一日、二日置いておけばおとなしくなつて良いのではないか。

そんな事を考えていると、八田は兄と桐嶋老人を連れてきた。

「行くぞ」

惘然とした態度で、八田の兄が言い放つ。

その整い過ぎた彫刻のような顔立ちと冷たいそのそっけない態度に僕は嫌が応なしにドキリとする。

だが、彼よりも僕の心臓をドキドキさせたのは桐嶋老人であった。いや、正確には桐嶋老人が担いでいた物であるが。

それは猟銃であつた。

やはり熊も出るようだ。

僕らが普段生活していて、銃なんて目にすることはまず無い。

まさにテレビの向こう側の存在である。

それが今日の前にある。

僕は良く分からない興奮の中にいた。

「私も一緒に行ったらだめですか？」

僕らがまさに家を出ようとした時、神谷さんが八田の兄にそう言った。

「足手まといだ。邪魔だから来るな」

八田の兄はそう答える。

冷たいが、まさにその通りだった。

多分負傷した加藤を担いでここまで来なくてはいけなくなるだろ

う。

その時、神谷さんは戦力外だ。

「でも、私も加藤君のことが心配で・・・」

涙声で訴える神谷さんに八田の兄は見向きもしない。

健気な子だ。

あんな加藤なんかのために。

「好きにすればいい。私はどうなっても知らないからな。俊佑、お前が面倒みるなら連れていけ」

そう捨て台詞を残して八田の兄は家を出ていく。

「ねえ、いいかな？八田君。私も行っても」

「あっ・・・うん」

すっかり意気消沈している八田。

神谷さんの話をちゃんと聞いているのだろうか。

帰って来てからずっとぼうつとしている。

とりあえずそのまま同じようにぼうつとしていては、八田の兄に遅れるので、僕も家を出ようとした。

そして、見てしまう。

神谷さんの小さなガッツポーズを。

それを見て僕は悟った。

きつと神谷さんはこの機に少しでも八田の兄にお近づきになろうとしているに違いない。

怪我をした加藤はだしに使われたのだ。

そう思うと加藤が少し哀れだ。

そして、少しでも健気だと思ってしまった僕も。

それから僕達は八田の兄を先導にして山道に入っていった。

山道は登山道の様な整備されたものではなく、獣道に近い。

ただでさえ山道になれていない僕と神谷さんはすぐにばてた。

もはや疲れて会話もろくにできない状態になってしまった。

きつと神谷さんの心中ではこんなはずじゃなかったと後悔している事だろう。

それにしても夕暮れの木々の中を歩くのは少々怖い。

僕が馴れないだけかもしれないが、何処からか何かが出てくるような気がしてしまう。

「もうすぐだ」

八田がポツリとつぶやく。

その言葉通り林は終わり、開けた場所に出る。

小高い丘と言ったところだろう。

そこは切り株があつたり、生えている草の丈が同じだったり、人為的に整備されているようだった。

そして、丘の中央には大きな木が一本あつた。

その木がここに来る時に神谷さんが見つけた木だと分かるには少し時間がかかる。

木には大量のカラスがとまっていて、葉っぱが黒く染まっているように見える。

僕の背筋に寒いものが走る。

しかもカラスたちは寝ている風でも無いのに全く鳴いていないのである。

「ここだよ」

加藤の姿は見えない。

いるのはカラスだけ。

木々にいるものとそこからあぶれたのだろうか身を寄せ合っているようなカラスの塊。

僕は訳も分からず、ぼんやりしていると、ターンツと耳をつんざく破裂音がした。

音の方を向くと桐嶋老人が空に猟銃を向けている。

僕と同じように驚いたカラスたちが思い出したようにカアカアと悲鳴を上げ空へ。

三章 「カラスの止まり木」 - 2 -

そして、こちらも神谷さんが悲鳴を上げ、気を失った。そこに確かに加藤はいた。

けれどもそれはもう人と呼べる代物ではなかった。

僕は口元を押さえ、込み上げる嘔吐感をこらえようとした。

しかし、抑えきれずに人目もはばからず吐瀉物をまき散らす。

見た目には車に踏みつぶされた猫を大きくしたようなものである。けれども胸に渦巻く不快感は、猫の比では無い。

原因はつい先ほどまで僕らと会話していた加藤であるという紛れも無い事実。

八田の顔面蒼白であつた理由がここに来て初めて分かった。

八田は知っていたのだ、この惨状を。

だからあんなにも言葉少なに！

怒りにも似た感情が僕を支配する。

けれど、感情は言葉を成さない。

まるで今にも泣きそうな八田の表情を見て、僕の拳は地面を殴つた。

「俊佑」

皆一様に沈んだ表情をしている。

しかし、彼だけは眉一つ動かさず、彫刻の美を保っている。

夕日に照らされた彼の頬は、頬紅をさしたようであるのだが、もしかしたら彼の中には血が通っていないのかもしれない。

「はい」

叱られた子供の様な八田。

兄の言葉にびくりと肩を震わす。

「お前は倒れた彼女を背負って山を降りろ」

「はい」

「桐嶋さん。悪いが警察を呼んでくれないか？」

「了解いたしました。冬馬坊ちやまはどうなされるおつもりですか？」

「私はここでこれ以上カラスに食い荒らされないようにしておこう。警察が来た時に何が何だか分からないといった状況では困るだろう」「了解いたしました。それではお氣をつけて」

「ああ。それでは頼んだよ」

空に飛び立ったカラスたちはまた丘の上にある木に戻っていく。

そして、その様子をじっと見つめる八田の兄。

無口すぎるカラスたちと佇む人形のような八田の兄との間では何か聞こえぬ会話がなされているようにも思えた。

「さあ、歩けますかな？」

桐嶋老人は猟銃を肩にかけ直し、僕の腕を掴み体を起こしてくれる。

「ええ、大丈夫です。少し気分が悪いだけですから」

「山を下ります。よろしいですか？」

加藤をその場に置いていくのは忍びなかったが、僕はやらねばならない事があった。

八田に聞かなければ。

何故こうなったのかを。

そして、僕は八田の兄をその場に残し、山道を下りていった。

加藤の死がショックすぎて、気にならなかったと言えば嘘になる。確かにこの時僕は違和感を覚えた。

あとで思えば、この時覚えた違和感を口にしていれば何か変わっていたかもしれない。

そう、いつも僕はあとで思う。

間章 「悪夢」

僕は磔にされていた。

周りには死体が転がり、まさに死屍累々と言った感じである。

僕の体もどうやら所々腐っているようで、どうにも動きようが無かった。

けれども痛みも苦しみも無く、意識だけがしつかりとしていた。

もやのような薄雲が天を覆い、日の光はぼんやりとしている。

僕は雨を待つでもなく、風を待つでもなく、ただ空を眺めていた。すると、天から大きなカラスがやってきた。

その巨大なカラスは僕を張り付け台ごと鷲掴みにすると、空へと連れ去った。

その時、腐っていた右手足がもげる。

僕は空の風を感じながら思う。

何処へ連れていくのだろうと。

その答えはやがて耳に届く。

ピイピイと鳴き声が聞こえた。

そうか、僕はこの大ガラスのひな鳥のえさとなるのだ。

下界を見下ろすとそこには藁のようなもので編み込まれた大きな巣がある。

その中に見覚えのある人物がいた。

加藤である。

加藤はよだれかけをし、身の丈ほどのナイフとフォークを力チ力チ鳴らしている。

ぴいぴいと鳴いているのも加藤であった。

まさか、そんな・・・

僕は身じろぎするが、どうにも体は思うように動いてくれない。

そして、僕は大ガラスの巣に放り込まれる。

嫌だー！加藤にだけは食べられたくない！

四章 「聴き取る朝」 - 1 -

ぐっしょりと汗をかいていた。
変な夢を見たせいであろう。

それに加藤の事でのストレス、山道を歩いた疲労感で体は鉛のよう
に重かった。

隣を見て見ると昨晚と変わらない綺麗に敷かれた布団があった。

八田は昨日、ここには来なかったのだろうか？

結局昨日は八田と話すことはできなかった。

家に帰った時には八田の姿はもう無く、探そうかと思ったが僕は
止めた。

人の家の中を散策するのは非礼に値するが、事情が事情である。

家の中をうろつこうとも別段とがめられることも無いだろうとも
思ったが、その必要も無いかと思ってしまう。

桐嶋老人が八田の分の布団を敷いているのを見て、ああここに戻
ってくるのだと思ったのだ。

けれど、僕は先に眠りに落ちた。

そして、もし待っていても八田は姿を見せなかったかもしれない。

八田を探さなくては、そう思った。

「ああ、起きたようだね」

それから程なく人に会う。

八田の兄だ。

その表情には笑顔が貼り付けられていて、冷徹な顔しか知らない
僕にとっては違和感以外の何物でもなかった。

「加藤君のお友達の名取昂司君でいいのかな？ 起き抜けで悪いが、
少しお話を聞かせてもらえるかな？」

そして、もう一人。

物腰の柔らかな中年の男性がいた。

恐らく警察の関係のものであることは見てとれた。

もしかしたら八田が昨日部屋に帰ってこなかったのはこの警察につかまって事情を聞かれていたからかもしれない。

それならば多少事情は聞いているはずだろう。

「はい。ですが、こちらからも一つ質問してもよろしいでしょうか？」

「言える範囲の事でよければ」

「加藤は、加藤は何故あんな風になったのですか？僕には今でも信じられません。そもそもカラスに襲われて死んだ人の話なんて聞いた事もない。果たして本当にそんなことがあり得るのですか？あり得るのだとしたら、一体どうやって？走って逃げるなり出来たはずだ。むざむざカラスに肉を食い破られるのを待つなんて、そんな事あり得ない。何故、どうして？」

僕は一気にまくしたてる。

けれども目の前の中年の男性はそのような状況になれているのか、うんうんと頷き冷静な対応をしている。

「君の疑問は当然だろう。私も五年前にはそう思ったからね」

「五年前？」

中年の男性は八田の兄に視線を送り、コンタクトをとる。

それに答える様に八田の兄は笑顔で頷く。

「五年前、八田君のお父さんも同じ現場で、同じようにカラスに襲われてね。その当時は君と同じことを思ったよ」

「え？！」

僕は八田の兄を見てやるが、彼は表情一つ変えはしない。

「この辺のカラスは一際凶暴だね。かくいう私も襲われてこの有様さ」

中年の男は袖をたくしあげ、腕を見せる。

そこには一筋の傷跡。

「五針も縫う大けがだった。その節は八田君にも世話になったかな？」

「いえ、私はただ応急処置をしたまでですから」

「名譽の勲章と言う訳ではないのだがね。五年前、八田君の父親が襲われた後、近隣の住民もさすがに怖がってカラスの駆除をしたんだ。けれど、その際居合わせた私も襲われてね。実際襲われてみなければ、こういうものの恐怖は分からないようだろうけど」

「けど、死に物狂いで逃げれば命を失うまでにはならないのでは？」
納得がいかない。

それは同時に僕の中で加藤を過大評価していると言う事でもある。
「このカラスは逃げるなんて事を許しはしない。奴らは君達が生きているよりも優秀だ。目の前で親を殺された私と弟にはそれがよく分かる」

「例えば、名取君。君がいきなり路上で誰かに刺されたとするだろう。その時、君は本当にすぐに逃げ出す事が出来ると思うかい？」

僕は思考する。

もし僕が加藤だったなら。

「痛みにつめき、その場にうずくまるかもしれない」

「その間に囲まれて身動きが取れなくなって、どうしようもなくなるのだってある。もちろんそうなる事もあると言う可能性の話であって、事実がどうかは分からない。加藤君が実際どうなっていたような悲惨な姿になったのか、それを知るために私達は事情を聴いているのだから。あらゆる可能性があると私は思っているからね。じゃあ、真実に近づくためにも君の知っている事をおじさんに話してくれるかな」

長年の技術でもあるのだろう。

その中年の男性のにこやかな顔を見ると、思わずどうでもいい事まで吐露してしまいそうな気分になる。

「それではそろそろ私は席を外した方がよさそうですね」

「ああ、そうしてくれると助かるね」

外面として用意された八田の兄の笑顔は崩れる事無く、その場を完璧に演じ切り、去ろうとしていた。

「待ってくれ」

聞いておかなくてはならない。

「八田は、八田はなんて言っていたんだ？八田はその場にいたんだろ？加藤がカラスに襲われたまさにその現場に！」

八田の兄はわざとらしく肩をすくめ、少なくとも僕にはそう見えた、中年の男に視線をまたやる。

捜査の情報の管理を私にはしかねると言った風である。

視線に答える様に心得たとうなずく男。

四章 「聴き取る朝」 - 2 -

「俊佑君が言うには、完全に失念していたと。正直、私は当時高校生だった俊佑君が父親が亡くなった場所をそう簡単に忘れるものだろうかとも思ったのだが。しかし、俊佑君のひどい落ち込みようを見て、その言葉に共感したのも事実だね」

「弟が落ち込んでいたのは私が弟を叱ったのも一つ要因としてあるでしょう」

「あとは彼の言葉を現場で検証しないとね。何とも言えないかな。それと具体的に加藤君がどの様にクラスにやられたと言うのは伏せさせてもらうよ。あまり話を聞いても気分の良い話ではないし、出来れば話をする私も遠慮したい類だ」

八田の言い分だと加藤を危険な場所だと忘れていて、案内し、結果あの惨劇だと言う訳か。

過失と一言で片づけるには余りにも大きすぎる犠牲だ。

もし僕が八田の立場だったらと想像するだけで、僕の胸は締め付けられ、息苦しくなる。

きつとあの時も加藤の死を隠そうとしていた訳ではないのだろう。口にするのが恐ろしかった。

それはあくまで僕の想像する感情であつたが、僕の中には確信めいたものがあつた。

「さて、そろそろ話を戻しても良いだろうか？では、聞かせてもらうが・・・」

それから僕は昨日の僕について出来るだけ正確に答える。

問答は粛々と進み、終わるころには昼前になっていた。

ひどく疲れた。

あの広い部屋に戻ると、

「お帰りなさい」

神谷さんがいた。

八田の姿は見えない。

神谷さんは一人でいるのが不安で、僕が八田がいなかったこの部屋へ来たのだろう。

僕が戻ってくるまでこの広い部屋にずっと一人だったのだろうか。もしそうならさぞ心細かったろうと、神谷さんの元気の無い顔を見て思う。

「次は神谷さんの番かな？」

「?・・・ああ、私はもう朝一で済ましたから」

「そう。じゃあ、僕が四人の中で最後つて訳だね」

「うっん。まだ加藤君が警察とお話してるよ。きつと」

「そうか」

一体あの加藤のグチャグチャになった体でどれほどの事が語れるのかとも思うが、少しでも多くの言葉を受け取れたらいいと思う。

そんな事を思いながら、僕は腰をおろし、ぼんやりと部屋のどこかを眺める。

気の利いた言葉一つでもかけなきゃなのだろうが、何も浮かばない。

そして、僕らの間から会話は無くなった。

お互いの距離を探りながら、どうしていいか分からなくなっていった。

そんな重苦しい空気の中、ふすま戸が開く。

八田が来たのかと構えたが、現れたのは桐嶋老人だった。

「皆さま、俊佑坊ちやまを知りませぬか？」

「いえ、僕はまだ今日になって八田の姿を見てませんが。神谷さんは？」

「うっん。私も見てない」

そして、神谷さんはさっきまでいじっていた携帯で八田にコールしてみる。

しかし、首を振り、

「電源切ってるかも。繋がらないよ」

「そうですね。もし俊佑坊ちやまがこちらに来られましたら、ぜひ私にこ一報いただけますかな？」

僕は頷くと桐嶋老人は出ていった。

「八田君、どうしちゃったのかな？何かあったのかな？」

か細い声で泣くような神谷さん。

「大分落ち込んでいたみたいだからな。きっと加藤の事で僕達に顔を合わせるのも気まずいと思うし、少し一人になりたいのかもしれない」

「そっか。別に私達責めたりしないのに」

「それでも八田自身は責めずにはいられないんだろ。自分を。僕だってそうだから。あの時、僕も加藤達と出かけていればこんな事にならなかったんじゃないかって後悔している」

あの時、少しこの旅が楽しくなりかけていた時だ。

気を利かせて付き合っていれば。

思い返せばいつも僕は利己的で、怠惰であつた。

自己嫌悪に押し潰されそうになる。

そうは思ふも過去は変えられず、未来に対してできる事も限られていた。

ただ僕達は八田を待つしかできなかった。

五章 「刻は来たり」 - 1 -

夕刻である。

飛び込んだきたのは桐嶋老人。

「俊介坊ちやまが見つかりました」

動揺している風の桐嶋老人に少し怪訝に思っていると、

「お前も来るのか？」

後ろから続いて八田の兄が来る。

その言いようは朝のものとは違い、初めに会ったときと同じような冷たいものであった。

やはりこちらの方が正体らしい。

「ああ」

立ち直れというのは少々酷かもしれないが、このまま加藤のことを引きずって置いてはそれこそ八田のためにはならないだろう。

十分一人で考える時間はあったはずだ。

そろそろ僕らの声に耳を傾ける余裕もできているかもしれない。

「そうか」

「あの、私も・・・」

神谷さんも声をあげるが、八田の兄は首を振った。

今度は下心などない。

けれど、

「いや、この前と同じように倒れられては困る。君にはここに残ってもらおう。桐嶋さん、家の方は頼みました。さあ、行くぞ」

その言葉に僕は気づく。

八田が今どうなっているのかを。

神谷さんは茫然とした間を置いて、声を押し殺せず、泣いた。

僕は他人の家だというのに、怒りにまかせて柱を殴る。

拳はすりむき、血が流れる。

八田の兄はそんな僕を責めもせず、もう一度行くぞと声をかけ、

家を出る。

僕は唇を噛みしめ、後を追う。

僕は山道を歩きながら悪態をつく。

今まで思考してきた事は何だったのだと。

もう少し気を使っていれば？

あの時、気を使うべきは過去ではなく、現在だったのだ。

八田の事を思い、少し一人にしてやった方がいいのではないかと考えた。

けれど、自責の念にとらわれ八田が加藤の後を追うなど、考えもしなかった。

しかし、それはもう少し考えれば、行き着ける可能性ではなかったか。

結局僕は自分の事しか見えていなかったのだ。

僕自身の苦しみを背負うだけで、八田の苦しみを背負う事を拒否していただけだ。

おそらく八田が最期の場所として選んだのは、自分の父親の最期を迎えた場所、そして、加藤が死んだ場所。

きつと少し前までそこには警察がいただろう。

警察があの場合から離れるまで時間があつた。

その間八田は何処かで身を隠していたのだろうか。

そう考えれば、時間的猶予はあつたのだ。

八田を見つけ説得し、思い直させる事が出来たかもしれない。

もちろんできなかったかもしれない。

それは可能性の話だ。

けれど、その可能性に気付いてしまった僕はやはり悪態をつかずにはいらなかった。

助けられたかもしれない命。

それを僕は奪った。

視界はやがて開け、あの場所にやってくる。

五章 「刻は来たり」 - 2 -

夕日に照らされた大きな木。

木にはカラスたちが身を寄せ合い、そしてそれとは別にカラスの塊が一つあった。

今ではそのカラスの塊が何を意味するのか良く分かっていた。

あそこに八田がいる。

八田の兄は無警戒にカラスたちに近づき、蹴散らす。

そして、僕の目に入る肉の塊。

僕は思わず目をそらす。

加藤の事を思い出し、また嘔吐感を覚える。

ここまで来たのだ。

自戒の意味も込めてちゃんと直視しなくてはいけないと思うのが出来なかった。

そんな僕の事を見かねたのか、八田の兄が近づいて、

「お前は何をしに来た？ さつさと山を下りるか？」

と言い放つ。

その冷徹な瞳からは涙など流れはしない。

自然と僕は口にする。

「あんたは悲しくないのか？」

それは当然の疑問。

「あんたの弟が死んだんだぞ！ あんたの肉親が！」

八田の兄は笑った。

「これでも悲しんでいる。君のように表面上の感情表現をしていないだけだ」

込み上げてきたのは怒りであった。

八田の兄の言葉は『感情がうまく表現できないのだ』と言う意味なのかもしれない。

けれど、僕には『お前の悲しんでいる様は上っ面のものなんだから

？」と受け取れた。

被害妄想かもしれないが、それが的を射たようで僕の心は波立ったのだ。

僕は思わず八田の兄に掴みかかり、彼の綺麗な顔を殴り飛ばす。八田の兄は尻もちをつき、その口の端からは血が流れた。

カラスたちがその血を見て興奮したのか、途端色めき立つ。

カラスたちの騒ぎたてる声に僕は一步後ずさるが、そこから先僕の足は固まったように動けないでいた。

逃げなくては。

そう本能が警告する。

しかし、同じ本能の恐怖が足を絡め取るのだ。

だが、僕の恐怖は的外れになる。

八田の兄が制止するように手を掲げると、カラスたちは再び静寂を取り戻した。

言い得ぬ威圧感とともに立ち上がる八田の兄。

口元を拭う。

僕はかかってくるのかと身構えたが、八田の兄は僕に背を向け、肉の塊の方へと向かう。

「明日の朝、すぐにでも帰るといい。これ以上ここにおいては今度は君がこんな風になるかもしれないからな」

「そんな脅しを・・・」

「君の言う通り、私はこれから弟との別れを悲しもうと思う。邪魔をしないでくれ」

その言葉には抗えない力を持っていたかのようにだった。

僕は夕日に照らされた八田の兄を一瞥し、その場を去る。

悔しさにまみれ、僕はずんずんと山道を下りていった。

そして、僕は道に迷った。

情けなくも、僕は出迎えた八田の兄に鼻で笑われることとなる。

第六章 「決意の朝」 - 1 -

翌朝、僕は車に荷物を詰め込み、八田の家を出た。もちろん主無き加藤の荷物も共に。

見送りは当然のように無く、まるで逃げるように出ていった。

僕は車を運転しながら、思う。

果たしてこのままでいいのか？

だが、戻っても良いのだろうか？

決断するには程遠く、けれど僕の心は何かを掴もうと必死にあがいていた。

そして、僕は車を止める。

怪訝そうに僕を見つめる神谷さん。

そして、僕は神谷さんを見つめ、聞いてみる。

「神谷さんはあの八田の兄さんの事をどう思う？」

その質問に神谷さんは驚き、そして顔を赤らめる。

「えっと、その、顔は好みかな。でも、あんまりよく話してないし、好きとか嫌いとかは決められないっていうか。そ、それよりも何でそんな事聞くの？もしかして八田のお兄さんに私の事聞かれたの？何か言ってた？」

違う、違うよ。

神谷さん。

「そうじゃないんだ。そう言う事じゃなくて。何かあの八田の兄さん、怪しくないかって、聞いてるんだ」

「もしかしてあの時言ってた。加藤君と八田のお兄さんの関係・・・本当だったの？」

あの時言ってた？

もしかして神谷さんは加藤と八田の兄と何かあった事を知っているのか？

「男の人同士の恋愛って本当にあるって事？」

神谷さん。

「違う・・・」

「そう言えば昨日、名取君達、帰りすごく遅かったよね。八田君の事もあるし、少し不謹慎かなっても思うけど。吊り橋効果って言うんだっけ、こういうの。名取君が悩んじゃうのも分かるけど、精神が不安定になってるから、つい勢いで・・・」

「違うつて言ってるだろ!!」

一喝。

車内は重苦しい空気と共に静まり返る。

僕は深く深呼吸を一つして話を続ける。

「ごめん。神谷さん。ここ数日の加藤の事とか、八田の事とかで不安なのは分かる。けど、だからってそういうどうでもいいような話題に逃げないでくれ。頼む。ちゃんと話を聞いて欲しい」

逃げないでくれ？

どの口がそんな事を言うのか？

逃げ続けた結果、今の状況なのに。
けれど。

だからこそ今ここで踏み留まらなければならぬんじゃないのか？
少しでもいい。

勇気の出る言葉が欲しかった。

「・・・うん」

怒鳴ったのが効きすぎたのか。

神谷さんは僕を恐怖の目で見ていた。

きつと僕の事が狂人に見えている事だろう。

「昨日、僕は八田の兄さんを殴った」

「え?!・・・どうして?」

「あいつは実の弟が死んでも涙さえ見せなかった」

「けど、悲しくても泣けない人なんてたくさんいる。だからって・・・」

「もちろんだ。そんな事だけで僕は八田の兄を疑ったりはしていな

い。よく考えてくれ、神谷さん。最初に加藤が襲われた現場で、八田の兄は何であんなに冷静でいられたのか。五年前に父親が同じように殺されたから？違うな。それならば逆にフラッシュバックして、取り乱したりはしないか？それに八田の態度も気になる。まるであいつに対して怯えている様だった。例えば、例えば八田が自分の兄が加藤を殺した現場を見ていて、口封じに殺されたとしたら・・・」

「そんな事！」

「あり得ないとは言いきれない。よく思い出してくれ。加藤が死んだあの現場に、何で一人残ったのか？普通思わないか、自分もカラスに襲われるんじゃないかと」

「確か銃を持っていたから・・・」

「それは桐嶋さんがずっと持っていた。あの時、八田の兄は手ぶらだ。あいつはカラスが怖くないんだ。何故か？それはカラスが自分に襲ってこない事を知っているからだ。昨日の朝、警察の人にカラスにつけられた傷を見せられた。けれど、今思えば、あの男は八田の兄と非常に仲がよさそうにしていた。もしあいつが黒だしたら、あの男は本当は警察じゃないかもしれない可能性だってある」

「グルだったって事？」

僕はうなづく。

「僕はそう思う。けれど、仮にあの刑事らしき人物が本当に警察の人間だったとしても八田の兄にはまだ怪しいところが残ってる。昨日、僕が八田の兄を殴った時、瞬間カラスたちが騒ぎだした。そして、あいつが手をかざすと途端鳴き止んだんだ。僕にはまるであいつがカラスたちを操っているように見えた。もしそんな事が出来るのならば、あるいは警察の人間を襲わせ、恐怖心を植えこんだり、襲わせる人間を選ぶことだってできるんじゃないか？」

「鷹匠みたいなもの？」

「そうかもしれない。実際に襲わせてる現場を見た訳じゃないから、確実な事ではない。僕が見たことも、もしかしたらただの偶然かも知れない。偶然にしては出来過ぎているとは思うけど。だから僕は確かめたいんだ。これは本当に僕の妄想で、真実はただの不幸な事故なのか。それとも・・・もっと恐ろしい事なのかもしれないのか」

神谷さんは手持ち無沙汰で胸の前で、絡めていた指を強く組み上げる。

祈るように、固く目を閉じる。

「だって私その現場見ていないし、何言っただって信じられないよ。加藤君の事も八田君の事もただでさえ辛いのに、それが殺人事件みたいだなんて、そんなの私信じられない」

僕の言葉は神谷さんには届かないようだ。

けれどそれは仕方のない事。

八田の兄が怪しいと言うならば、神谷さんにとって僕だって怪しく映るはず。

八田の兄と違って僕の方が二人との関わり合いが強い。

それは同時に動機という点で僕の方が強いのである。

もしかしたら神谷さんの中では、僕に殺されるかもしれないとい

う恐怖とも戦っているのかもしれない。

僕は神谷さんの組んだ手の上に自分の掌を重ねる。

「信じて欲しい。僕の言葉を。あの時こうしていればとか、僕はずっと逃げ続けてきたんだ。けれど、もうそんなのは嫌なんだ。後悔したくない。だから、お願いだ」

自然と僕の手は神谷さんの手を強く握っていた。

そして、それに答える様に神谷さんも僕の手を強く握り返してくる。

「・・・うん。信じるよ」

その言葉に自然と涙と感謝の言葉が流れる。

「けど、私達にできる事なんて限られてる。一体どうするの？」

「加藤の死んだあの現場に行ってみようと思う。何か見つかるかもしれない。何も見つからないかもしれない。けれど、僕らが一歩を踏み出すのはきつとあそこからなんだと思う」

そう、これは僕にとって逃げずに戦おうとする初めの一歩だ。

そして、彼にとって詰めの一歩。

七章 「穴蔵の瞳」 - 1 -

僕は引き返す。

もう迷いはしない。

もう間違ったりはしない。

後悔など二度とごめんだ。

踏み入れた山道の緑は美しく、生命力あふれていた。

思えば、ずっと山道を登っていたのは夕方。

薄暗く、赤みの差す道とは印象が違って当然である。

まるで初めて通る道のようなようだ。

「ねえ、名取君」

神谷さんは聞こえてくる小鳥の声と同じような綺麗な声で僕の名を呼ぶ。

出来る事なら時間を止めて、ずっと聞いていたい。

そんな気持ちにさせた。

「あのさぁ・・・」

駄目だ。

その続きを言っでは。

何故神谷さんはいとも簡単に僕の幸福な時間を破ろうとするのだろうか。

きつと今の僕の気持ちなんて分かりはしないんだ。

言葉にしなければ、状況は変わらない。

そんな事は分かっている。

けれど、その言葉がどれだけ僕にとって残酷なのかを彼女は知らないんだ。

だから、言っではいけない。

その言葉を。

「もしかして、道に迷った？」

その言葉に僕の足は止まり、僕に倣って神谷さんの足も止まった。

格好つけた手前、正直に告白できない。

何かいい訳はないものかと僕の頭は錯乱するが、全く何も浮かばない。

だって仕様がないうじゃないか。

山に入れば木ぐらいしかないのだから。

普通何処も一緒に見えるだろ。

「な・・・ここに？」

「?・・・あれ、何か言った神谷さん？」

「だから、迷ったんじゃないかって」

「いや、そうじゃない。『何で・・・ここに』そんな言葉が聞こえたんだ」

「恥ずかしいからってごまかさないでよ。男らしくないよ、名取君」
僕はきよきよと周りを見渡す。

何もいないはずである。

そんな先入観があつたので、実際に視線が合ってしまうとその驚きようは尋常では無かつた。

「な、何かいる!!」

「え?何、何なの？」

僕は無様に後ずさり、足を取られて尻もちをつく。

「ちよつと待つて待つて待つて。普通に怖いって。そんな冗談やめてよ!!」

僕の視線の先にあつたのは、道からそれたところにある防空壕の様な横穴である。

穴は木陰にうまく隠れ、その存在感を消している。

もし声がしなければ絶対に気付かないであつたらう。

穴の入口には錆びついた格子があり、その隙間から爛々とした目でこちらを見つめる黒い人影があつた。

「人だ。人がいる!？」

「え?!嘘、嘘?!」

「本当だつて!ほら、そこに・・・」

僕は穴を指差し、神谷さんはその先を見る。

しかし、

「い、いないよ」

そこにはもう人影は姿形もない。

信じられない。

「もしかして・・・本当に嘘ついた？」

「違う」

僕は彼女の怪訝そうな視線を無視して、穴の方へ近づく。

穴の付近に真新しい足跡。

やはり人がいる。

錆びついた格子の扉には錆び一つ付いていない錠前がついていた。

「誰かいるのかー！」

僕は格子の向こうに向けて叫ぶ。

返事は返っては来なかった。

「ねえ、ねえ、危ないよ。やめようよ」

確かに危ないかもしれない。

穴の向こうにいる人物が何者なのかも分からないし、もしその人物が襲ってきたりしたら。

その他にもこの穴自体も崩れるような代物なのかもしれない。

「大丈夫」

その言葉に信頼性は全くないが、僕は構わず錆びついた格子を蹴り始める。

『何でここに』

その後続く言葉は何だ？

ここに人がくるのか？

ここに気がつかないのか？

それとも、何でここに僕達が来たのか？

僕は予感めいたものがあつた。

きっとあの人影は僕らの事を知っている。
ガキン。

耳障りな金属音を立てて、錆びついた格子の一つが外れた。
何とか身を縮こませて、やっと通れるような隙間。

僕は神谷さんを入り口に置きざりにして、穴へと乗り込む。

「誰もいないのかー」

いや、いるはずだ。

穴はそれほど狭くなく、奥の方まで人が悠々と通れるほどだ。
ぼんやりとした明かりが奥の方から漏れ出ている。

恐る恐る足を運ぶと、まるで何かの貯蔵庫の様な開けた部屋に出る。

そして、その隅には体を抱えて震える人物がいた。

「何故、ここにいる？」

僕に背を向けたまま答えようとはしない。

そうやって隅っこで、身を小さくして、うじうじとして、震えていればその存在が消えるとも思っているのか。

「どうしてここにいる！ 答えろ！ 八田！！」

八田だ。

そこにいたのは八田だった。

僕は力任せに八田の腕を掴み、その場から引つpegすように放り投げる。

そして、半ば馬乗りのような状態で八田を組み伏せる。

「答えろ！」

八田の体を揺すりながら、僕はもう一度吠える。

八田は泣きながら嗚咽を漏らすだけで、何も語らない。

背ける顔を無理やりに掴み、僕の方を向かせるが、八田の眼球は僕と視線を合わせようとはしない。

「は、八田君？！」

大騒ぎしている僕の声に意を決して穴の中に入ってきたのだろう。神谷さんの声が僕の固めた拳が振り下ろされるのを止めた。

束縛する力が緩まり、今が機だとはかりに僕の元から逃げる八田。そして、また隅っこで震えている。

「何で八田君がここにいるの？」

「分からない。けれど、八田は生きていた。これで八田の兄がさらに怪しくなったのは確実だ」

「でも、良かった」

神谷さんは緊張の糸が入れたのか、その場にへたり込む。

「八田君、生きてたんだ。私、死んじやったと思ってたから・・・良かったあ」

神谷さんはとめどなくあふれてくる涙を必死で拭っている。

「ごめん」

そんな神谷さんに八田は小さく呟き、謝罪する。

喜ぶべきなのだろう。

死んだと思っていた友人が生きていたのだ。

しかし、僕の中を駆け巡っていたのは怒りだ。

僕の握り締めた拳は生き場を失い、さ迷っていた。

「八田。お前が生きていたって事は、もしかして加藤も生きているって事は・・・」

「ごめん」

自分でもその返答が返ってくるのは分かっていた。

八田の時とは違い、加藤の死体はよく目に焼き付いている。

もしあの時、八田の死体だと八田の兄に見せられた時、よく見ていたらこんな状況にならなかったのだろうか？

きつと一目では分からないように細工してあつたろう。

けれど、絶対に何も気がつかないとも言切れない。

まだだ。

また僕は後悔している。

情けなさに、ようやく拳の行方が定まる。

僕は自分の額を思いつき殴り飛ばす。

手加減などせずに殴ったものだから、頭がぐらりと目まいを起す。

八田も神谷さんも何をしているんだと、啞然としていた。

「だ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

僕は頭を振り、佇まいを直す。

心配そうな神谷さんに答えて、八田に問いかける。

「八田。お前をここに追いやったのは、お前の兄か？そして、加藤を殺したのも」

「ち、違う。名取さん、それは違う。加藤さんを殺したのは・・・」
「今更自分の兄をかばいだてするのか？」

「・・・違う」

またぼつりとつぶやく八田。

煮え切らぬ態度に多少腹が立つが、今度は自制が効いた。

「まあ、いい。神谷さん。これから僕は八田の家に向かおうと思う。警察にも連絡して、あいつを捕まえる。証拠もある事だしな」

「え？証拠？」

「ああ、ここにいる八田が証拠だ。自分の弟を死んだとして、こんなところに監禁している。それだけで犯罪だ。とりあえずその事で一度捕まえてもらう。そこから加藤の死んだことについて詰めていけばいい。その時は八田、お前も覚悟を決めてもらうからな。お前の知っている事全て、警察に話してもらう」

八田は睨む僕の視線に顔をそらす。

「行ってくる。八田の事を頼む」

「うん。気をつけて」

「ああ、大丈夫。・・・今度こそ」

そして、僕は神谷さんと八田を置いて、八田の家へと向かった。見ているがいい。

必ずお前を追い詰めてやる。

八章 「将棋盤の暮石」 - 1 -

「ありがとうございます」

僕は八田の家まで送ってくれた唐沢村の善良な村人に礼を言った。きつと彼がここまで送ってくれなかったら、僕はここにはいなかっただろう。

あれから山道を急いで下りて、警察に連絡してから気付いた。

『ここは何処だ？』

見覚えの無い風景。

そして、

『車が・・・ない』

始め、盗難に遭ったのだと思った。

しかし、そうでは無かった。

無くて当然なのである。

認めざるを得ないだろう。

僕は・・・どうやら方向音痴らしい。

散々乗って来た車を探しまわったが見つからず、神谷さんの『大丈夫？』と言う安否を心配するメールにも答える事は出来なかった。

結局、近くの民家に助けを求め、送ってくれることと相成った。

しかしながら、彼の有名な巖流島の決闘であつては、武蔵も遅参し、勝利を収めた。

要は結果が大事なのだ。

僕は醜態を無理やりに肯定し、八田の家の玄関の前に立った。

僕は深く深呼吸し、早鐘を打つ鼓動を整えた。

ガラリと戸をあけると、待ち構えたようにそこには八田の兄が立っていた。

「まだいたのか。君は」

「ああ」

八田の兄は眉をひそめ、あからさまに嫌な顔を僕に向ける。

「警察の人が来ていると思うが、何処に？」

「ああ。やはり君がな」

八田の兄は鼻で笑う。

「先程までいたよ。何でも『加藤君を殺した真犯人が分かった』との触れ込みがあつたそうだ。おかげでまったく知らない問答をする羽目になってしまった。結局君が姿を現わせなかったから嫌がらせだろうという結論になってしまった。全く、君は一体何を考えているのか」

「もしかして警察は帰ってしまったのか？」

八田の兄は僕の質問を肯定する。

なんて事だ。

とんだ肩透かしである。

「友人が亡くなつてショックなのも分かる。気持ちの整理ができず、他人のせいにしてしまう事も分からないでもない。君のした事は褒められた事ではないが、敢えて私は責めずにいよう。早々にここから立ち去ると良い」

そう言つて立ち去ろうとする八田の兄を僕は必死で呼び止める。

「ま、待つてくれ！」

「これ以上何か？」

「僕は本当に真犯人を知っている」

「ほう、真犯人ねえ。加藤君はカラスに襲われたのではなく、誰かに殺されたと？一体誰に？」

八田の兄は面白そうににやにやと僕の顔を見る。

まるで僕を挑発するようだ。

「それは・・・貴方だ」

「なるほど。私が真犯人か。私が加藤君を殺したのだと。動機は？凶器は？」

「それは・・・」

「まさか君の勘だとは言わないでくれよ」

分かる訳がない、そう言つた余裕が八田の兄にはあつた。

実際に僕は見せて、これがそうだと言う証拠など手持ちにはない。
「加藤の死体を見た時の冷徹さ。カラスに対する恐怖心の無さ。僕にはどうしても違和感があった」

「まさか本当に勘なのか。そんなもの君の感じ方次第だろう。くだらない。探偵ごっこがやりたいなら役者にでもなればいい。ああ、でも君のその演技力では初めに殺される死体役がお似合いかな。私のことを君がどう思おうと構わないが、一般常識として迷惑をかけるような事はして欲しくないな」

確かにそうだろう。

僕は加藤殺しについての証拠は持ち合わせていない。

しかし、切れるカードがある。

「貴方の言う通りこのままでは僕の妄想かもしれない。けれど、貴方の悪事を知る者がいたら？」

八田の兄の余裕で満ちた顔に陰りが見える。

「ほう、それは一体誰かな？」

「とぼけるなよ。それはあんたの弟、八田俊佑だ。今回の事件に対して違和感を感じていた僕らは、あのカラスたちがいた木の元に行こうとしていた。そして、偶然にもここに来る前に八田を見つけた。僕の役向きでないというのなら、実の弟に引導を渡してもらうのが良いだろう」

「弟を。見つけたのか？」

途端、八田の兄の顔色が変わる。

綺麗な顔が動揺して歪む様は、僕を興奮させた。

これであの傲慢な態度はもうとれまい。

しかし、僕の予想は外れる。

八田の兄はすぐに冷徹な仮面^{ベルソナ}をつけ直すのだった。

「弟は今何処に？」

「・・・八田はあんたが閉じ込めたあの穴の近くで、神谷さんと一緒にいるよ。きっと今頃あんたが捕まるのを今か今かと待っているだろうさ」

面白くない。

けれど、そんな余裕をかましていられるのも今のうち。

もう一度警察を呼び出し、こいつを牢屋にぶち込んでやる。

さっきの通報を悪戯だと思われるから、多少手こずるかもしれないが何とかしてみせる。

「そうか」

まるで僕のことなど眼中にないとばかりにそっけない返事をした八田の兄は桐嶋老人を呼びだす。

そして、こそこそと二人で話し始めた。

平静を装っているが、内心穏やかでないだろう。

きつと二人でどうしたものかと相談しているのだろう。

無駄な事を、僕はそう心の中で嘲り笑っていた。

だが、そんな気持ちもすぐに消えてしまう。

八田の兄と話を終えた桐嶋老人が奥から取り出したもの。

それは・・・猟銃だ。

甘かった。

カラスさえいなければ手を出せない。

そんな慢心が僕にはあったのだ。

逃げ出さねばいけないと思うが、足がすくんで動けない。いや、逃げ出したところで一体何処に逃げると言うのだ。後ろからズドンとやられてお終いではないか。

僕は悔しさに拳を震わせ、目をつむり覚悟を決める。

ぎりりと奥歯を噛みしめ、来るであろう痛みを備えた。

死とはどれほどの苦痛なのだろうか。

思い起こされるのは加藤の無残な死に様である。

出来ればいつそ楽にと思ってしまう僕は、死してもきっと加藤に顔向けできない。

不意に僕の腕が引つ張られた。

「何をしている？君も行くのだろうか？」

はっと顔を起こすと、至近距離に八田の兄の美しい顔があった。

僕の腕を掴む手は男らしく大きい、その身から発せられる香は女性のような甘いにおいがした。

こんな状況で僕は何を考えているのだろうか。

きつと恐怖で僕の頭はおかしくなったのだ。

「一体何処に？」

当然の質問である。

そんな当然の質問に八田の兄は苦悶の表情で、僕の腕を力強く握る。

「弟の所だ。このままでは一緒にいる彼女が危ない」

神谷さんが危ない？

それはどういう意味だと問う前に八田の兄は急ぎその場を後にする。

見渡すと桐嶋老人の姿も無い。

しばし茫然としていたが、僕は慌てて八田の兄の後を追うのだった。

また山道に行くのかとうんざりするが、追わない訳にもいかない。とは言え、慣れぬ道に行くのは大変だ。

急ぐ八田の兄の歩みの速度は速い。

それに比べて懐疑心を拭いきれていない僕は明らかに後れを取っていた。

そんな僕の様子を見て、八田の兄は立ち止まる。

「腑に落ちないと言った風だな」

「当然だ。一体何がしたいのか知らないが、無警戒についてくるなんて真似出来る訳ないだろ。あんたは怪しすぎるんだよ」

「やはりか。正直時間が惜しい。私を信用しろとは言わないが、このままのらりくらりとしてくるつもりなら置いていくぞ」

「よく言う。何の説明もなしに信用も何もないだろ」

「君を殺そうと思えば、先程殺せていただろ」

「人目を気にしただけかもしれない」

八田の兄は大きいため息をつく。

「だから、時間が惜しいと言っているのに。融通の利かない」

仕様がないと八田の兄は語る。

彼の大きな黒い瞳は僕をじつと捕らえ、そして僕の向こう側に過去を見る。

まるで紅を引いたような、その薄桃色の唇がゆっくりと動く。

「五年前の事だ。私は加藤君が死んだあの場所で父を殺した。私はカラスに父を襲わせた」

「やはりあんたが加藤も・・・」

にやりと八田の兄は笑うのだった。

間章・二 「震える手、握り返す手」

ギュルルル。

「おなか減ったなあ」

神谷はお腹が鳴ったのを気にして、八田の方を見るが、八田は虫の音を気にした様子も無く、道の端で黙ってじっとしている。

名取と山道を登り始めたのが昼前、八田を見つけたのが二時頃、もう既におやつ時こえ、四時過ぎである。

こんなことなら何か食べるものを持つてくるべきだったと神谷は思う。

「名取君遅いね」

神谷は八田に話しかけるが、返事はない。

また神谷も返事がない事を気にする様子も無く、友人達に宛てるメールを打っていた。

電波の状況は芳しくない。

神谷にとって名取の言う事や八田の怯えよう、加藤の死はどうしたって実感の無いものであった。

殺人だと言われてもそれはドラマなどＴＶの向こう側での事件。今でもあの加藤の死体は悪い夢なんじゃないかと神谷は思う。

実際八田の兄を見てもどうにも殺人鬼には見えないと言うのも神谷のそう思考する一端であった。

それよりも今現在携帯が繋がらないという状況の方が神谷にとっては実感しやすい恐怖なのである。

時折神谷は携帯を振るが、そんなことで電波状況は改善したりしない。

「だめだ。このままじゃ。何とかしないと、兄さんが来ちゃう」

ぶつぶつと呟きながら立ち上がる八田。

八田は名取がその場を去ってからずっとそんな調子だった。

穴の外と中を行ったり来たり。

そうかと思うと突然空を見上げて、じつと動かなくなったり。

神谷にしてみれば、また穴に戻るのかなと思っただけで気にしていなかった。

「神谷さん、どうしたらいいと思う？」

そう話しかけられるまでは。

動揺する神谷。

どうしたらいいと問われても、その答えを神谷は持ち合わせてないのだ。

「ねえ、神谷さん。お願い。僕を助けて」

八田はひざまずき、震える手で神谷の膝にすがりつく。

私もどうしていいか分からないと言うのが神谷の本心だが、今まで成立しなかった会話が出来るかもとも思う。

「八田君、私も一つ聞いていい？」

神谷の言葉に八田は顔をあげる。

どうやら神谷の言葉は八田に届くようだ。

「本当に八田君のお兄さんが加藤君を殺したの？」

その言葉に八田は目をそらす。

「名取君はそう言ってたけど、私にはどうしてもそうは思えないの。八田君のお兄さんがかつこいいからとかじゃないよ。加藤君の事はそりゃショックだけど、だからってそれが殺人だなんて。考えるだけで私、怖いよ。名取君の言うとおり私は逃げてるだけなのかもしれないけど、でも、怖いものは怖いんだよ」

八田はしばらく神谷を見つめていたが、突然すくつと立ち上がる。
「・・・加藤さんは・・・兄さんが殺した。だから！早くここから逃げなくちゃいけないんだ！」

八田は神谷の手を握り、引っ張る。

「ちょ、ちょと待って。何でそうなるの？名取君待たなくちゃ・・・」

「だめだ。名取さんはもう手遅れだよ。今からじゃ何をやっても無駄だよ」

「待つて！それってどういう意味・・・」

八田は神谷の質問に答える事無く容赦なく神谷の手を引き、その場から離れようとする。

神谷の抵抗むなしく、二人は不自然な格好で山道を歩き始めた。

「やっぱり八田君のお兄さんが加藤君を殺して、今度は名取君も殺されるってこと？！だったら早く助けなきゃ。ねえ、八田君！」

「早く・・・早くしないと・・・急がなきゃ」

また会話は一方通行になり、神谷は落胆する。

そして、どうやって名取を救おうかと模索するのだった。

（こんな山の中じゃ携帯は繋がらない。今から携帯繋がるところまで山道降りて、警察に通報？でも、それで間に合うのかな？名取君助かるのかな？でも、他に方法なんて・・・ないよ）

神谷の思案をよそに八田はぐいぐいと神谷の手を引っ張る。

氣遣わないその手は怯え震えていた。

その震えに神谷ははつと気づく。

（そっか。八田君も怖いんだよね。あんな事があつたんだもん。だから八田君もこんな状態になっちゃたんだし、こんな時は私がしっかりしなくちゃいけないよね。私が八田君を守ってあげなくちゃいけないよね。たいしたこと出来ないけど）

神谷は大丈夫と強く手を握り返した。

（きつと私が八田君を守るから）

そう神谷は心に固く誓う。

そして、手を引かれやってきたのは、

「ここって」

開けた丘、中央に大きな木が一本ある。

その場所は人工的に整備されたように下草は同じ長さに刈られ、切り株が多く点在する。

木には多くのカラス達がとまっているが、鳴き声一つも立ててはいない。

突然の来客をカラス達は皆一斉に凝視していた。

「ねえ。八田君・・・」

神谷は八田に問おうとして振り返ると、そのまま世界は九十度に傾く。

神谷の目には空を飛ぶカラスが見えた。

（何で？どうして？）

手足をばたつかせて暴れるが、何の役にも立たなかった。

何か声を発しようとするが、神谷ののど元を押し付ける手によって遮られた。

もうすぐ夕刻、カラスたちは家路につこうとしている。

（息が・・・）

神谷は遠のく意識の中で、目の前が真っ赤に染まっていくのを感じた。

九章 「山道を走らなければいけない理由」

- 1 -

八田の兄はにやりと笑った。

「本当に弟はいい友人を持ったようだな」

「何？」

「君は一度も弟を疑った事はないのか？加藤君と共にいたのは弟だろ。疑って当然だろ」

当然？

そんな訳ない。

「嘘だ！そんなでたらめ僕は信じるものか！」

「少なくとも弟は自分が殺したと言っていたが。自分がカラスを襲わせたと」

もう何を信じていいのか僕には分からなかった。

八田の兄が何かの策略があつて僕に嘘を言っているのか、それとも真実を語っているのか。

僕は八田の兄が嘘つきである事を願った。

信じたかった。

僕にとって八田を疑うより、八田の兄が僕を殺そうとしていると考えた方が僕には楽だった。

そして、思う。

また低きに流れていると。

「八田自身がそう言ったのか？」

「ああ」

「動機は？」

「さあ、そこまでは私に話しはしなかった。途中でだんまりを決め込んでしまったからな。ただ、一つ思い当たるとしたらあの加藤君は私達の父によく似ていたと言う事だろうか。私も彼を始めて見た時、父がいるのかと驚いたよ。自分で殺したのだからそんな事はないのはよく分かっているはずなのに」

八田の兄は自嘲する。

加藤の『俺の事じろじろ睨んできやがるし』というあの言葉は本当だったのだ。

自意識過剰だったのは僕の方だったと言う訳か。

「私達の父はあまりよい親ではなくてね。酒におぼれ、母や私や弟に手を出す最低の男だった。小さい頃、父はよく母に物を投げつけ、その度に私は母にすがり父に許しを請うたのを覚えているよ。そんな父を許せなかった。けれど、私は無力で結局殴られる母を見ているしかできなかった。あの頃、私と弟はよく父から逃げるためにあゝの木元へ行っていて、何度もあそこで夜を明かした事がある。あの木は八田の家の聖地みたいな所。あまり入ってはいけない所だったから、父も私達がそこにいると知っていても手を出せずにいた。私達の唯一の逃げ場所だったんだ。カラス達が私の言う事を聞いてくれるのを気付いたのもその頃だったろうか。カラス達を使い父を殺そうと思えば、いつでも殺せた。けれど、父と同じような最低な人間にはなるまいと心に固く誓いずっと私は我慢してきたのだ」

吐露される言葉の一つ一つが重く僕の心の中に響く。

果たして彼の言葉を僕は信じていいのだろうか？

答えるものは僕しかない。

「だが、結局五年前に私は手を出してしまった。少し考えれば分かる事だ。私にもあの愚かな父の血が半分は流れているのだから」

九章 「山道を走らなければならない理由」

- 2 -

「それで八田も、あんたの弟もあんたと同じようにカラスを使って加藤を殺したと。そう言う訳か。正直、あんたの血が呪われていようと知った事じゃない。加藤があんたの父親と似ているからっ殺されたって？ふざけるな。そんな事信じられるか！信じないからな。僕は。そんなくだらない理由で八田は殺しをやる奴じゃない！」

まるで駄々をこねる子供のようだ。

僕の言葉には何の根拠も無い。

ただ信じたくなかった。

「例えば、ここに目に見えないナイフがあつたでしょう。これがあれば警察に捕まらないで思う存分殺しができる。君がこのナイフを手にした時、一生使わずにいられると思うかい」

「そんなものはこの世にないし、仮にあつたとしても僕は絶対に使わない」

「・・・本当に？絶対に？人の良心の裏には狂気が潜んでいると言うのに？」

使うだろうか、僕は？

僕がそんな変わったものを、力を持っていたら・・・

「少なくとも八田はそう言う奴じゃない」

「・・・そうだな。私もそう思う」

「は？・・・今なんて？」

「私もそう思うと言ったんだ。私も弟がむやみやたらに力を使うような奴じゃないと思っている」

「ちよつと待ってくれ。あんた、八田が加藤を殺したって言うただろう」

「いや、私はそんな事を言った覚えはないが。私は弟が自分で加藤君を殺したと言っていたと言っただけだ。私個人の考えはカラス達の独断だっただんじゃないかと考えている。五年前の私の命令がまだ

有効で、父に似た加藤君が襲われたのか。それとも自分達のテリトリーに見ず知らずの人間が来たから襲ったのかは分からないが。ともかく私は弟がカラスを操れる能力自体持っているかどうかも疑わしいと思っている」

「何だよ。それー」

僕は脱力する。

てつきり僕は八田の兄は八田が加藤殺しの犯人なのだと思っていたと思うっていた。

きっと今へたり込んだら立ち上がる気力は残ってはいないだろう。

八田の兄の言葉を信じてはいけないという警戒心よりも、きっと八田は加藤を殺したんじゃないと言う安堵感が僕を支配していた。

「ただ弟はと言うと本気で自分が加藤君を殺したと思っているようだ。弟自身は加藤君の事を気に病んで、自首しようとしていたのを私が止めたくらいだからね。きっと五年前と同じようになるって。私が自首した時は信じてもらえなくて。カラスをけしかけてみたりしたが逆効果だった」

ああ、あれかと中年の男の傷を思い出す。

「じゃあ、何で八田をあんな穴蔵の中に？」

「ああ、それは弟の能力を確かめるためだ。先程も言った通り私は弟の能力を疑っている。確かめる必要があったのだ。もし能力がないのなら問題ない。けれど、能力があるのならばその力の制御の方法を教えないけなかったし、またその力は公にするようなものでもない。それこそ死んでしまったことにしておいた方が都合が良かった」

元々八田は実家に戻るつもりだった。

もし能力がなくなるとも、僕達がまたここを訪れさえなければ問題無かったと言う訳か。

「だが、今問題なのは弟が本当に加藤君を殺したのか、そうでないのかではない。自分が人殺しだと思っている人間が、事が明るみに

出ないように突飛な行動に出ないかだ」

「そんな事・・・」

「もちろん私の杞憂であれば問題ない。私もその方がいい。けれど、それはあり得る話ではあるのだ」

もし僕が八田ならどうする？

自分の悪事を暴露しようとする者を消すか？

かつての友であつたとしても。

「時間を食った。事情は呑み込めたと思う」

正直納得はしていない。

「急ぐぞ」

だが、もし彼の言葉が本当なのだったら、僕達は余計な事をしたのではないか？

そんな疑問が頭をよぎるが、八田の兄は思考する暇も与えず、先を急ぐのだった。

山道は走るものではないと思う。

八田の兄が急いでいる理由は分かった。

けれど、どう僕が頑張っても引き離されないようにするのが精一杯だった。

『いない・・・か』

穴蔵に到着し、八田を探す八田の兄が呟くが、それに答える余裕など僕には無かった。

『行くぞ』

荒い息を整える僕に八田の兄は無慈悲にもそう言い放つ。

もう走れない。

けれど、

『一体何処に？』

『あの場所だ』

その言葉に嫌な予感が全身を走り、総毛立つ。

息をのむ。

もしかしたら事は悪い方に転がっているのかもしれない。

きつと神谷さん達はお腹が減って、山を一旦下りて何処か食べ物が
ないかと、方向音痴僕のようにさ迷っているかもしれない。

気が付けばもう日も暮れようとしている。

お腹が減っても仕方がないだろう。

そんな風に自分をなだめるのだが、僕の鼓動は小動物のように早く
全身に血を巡らすのであった。

そして、結局ここに来てしまう。

元はと言えば初めの目的地はここだったのだから、ようやくこれ
たと言つべきなのだろうか。

すたすたと先をいく八田の兄を追い、全身をきしませながら僕は
ここにいる。

けれど、その痛みさえ忘れるほどの衝撃がそこにはあった。

人影があり、そこには八田、そして神谷さん。

それから肩を落とす桐嶋老人の姿があった。

その手には猟銃が握られ、八田の頭から流れる血で作られた血だまりは恐らくその猟銃で作られたものだろう。

同じように側に倒れる神谷さんは無事なのだろうか？

桐嶋老人は近づく僕達に気がついたのか、顔をあげる。

その目からはポロポロと涙がこぼれ落ちていた。

「冬馬坊ちやま・・・私は、私は・・・俊佑坊ちやまを・・・」

「大丈夫だ。何も言わないでいい。悪いのは私だ。私の無理な頼みを聞いてくれて、本当にすまない」

崩れ落ちる桐嶋老人を八田の兄がなだめていた。

「説得するんじゃないかったのか。八田を説得するってあんたはそう言っただけだ」

「そうするつもりだった」

「だったら何で殺した！」

八田の兄は憤慨する僕をまるでうるさいハエのように見ている。

「仕方がなかった事だ」

「仕方がない？そんな言葉で人の命を容易く奪うのか！あんたは！」
八田の兄はゆっくりとした呼吸を一つ置く。

「少し前に言った通り私は弟の能力の有無についての確信がない。

もし桐嶋さんが弟を説得に出て、カラスに襲われたらどうするのだ？その時彼女の命も、桐嶋さんの命も、無かったかもしれないのだぞ。最悪三人とも死ぬ事だって考えられる」

「それでも人殺しは人殺しだ」

理由なんて関係ない。

人の命を奪う事は罪なのだ。

「では、何か。君は弟がその人殺しになろうとしている弟を指をくわえて見ていると？」

「違う。他に方法があつ・・・」

「あつたのなら教えてくれ！弟が人殺しにならず、彼女の命を守り、かつ桐嶋さんの命も危険にさらされない安全な方法を！」

八田の兄の語気は強く、僕はその気迫に飲まれる。

「それは・・・」

「結局君は口だけだ。何も出来やしない。そんな君にとやかく言われたくはない」

でも、

でも、だったら力あるあんたは何ができた？

あんたにできた事は人を殺すことだけだ。

「確かに僕は何もできなかったかもしれない。でも、そんな僕だからあんたを許せない。八田の、加藤の命を奪った、あんたを！元はと言えば五年前にあんたが父親を殺した事が事の発端だろ。それを棚に上げて、何を言っている？罪は償うべきじゃないのか？あんたにそんな気がないなら僕が絶対に証拠を見つけて、あんたを警察に突き出してやる」

「ほう、面白い」

八田の兄は腕を真横に出すと、その腕に大きなカラスが一羽止まる。

カラスの癡猛な爪は八田の兄の袖を食い破り、その下の腕から血を欲する。

血は袖に染んでいく。

その血の紅はカラスの瞳に写し込まれ、僕を見つめる。

僕はカラスの瞳の向こうに紅の幻想を見る。

「では、やってみるといい。だが、忘れるな。こちらは殺そうと思えば、いつでも君を殺せる。こいつらの仲間は何処にでもいる。君が少しでも不穏な動きをすれば、すぐさまにその目玉をえぐり出し、腸をこいつらの胃袋に収めてくれる」

体は震えていた。

鼓動は早く、頭は妙にすっきりとした感覚がある。

怖くはなかった。

異常な状況に脳内麻薬がとめどなく流れているのだろうか。

血の流れも、筋肉の動きも、精神さえも異常をきたしている。

「やれるものならやってみろ！」

「ああ。望みとあらば、ここで血祭りにあげてやる」

まさに蛇とカエルである。

僕はあまりにも無力だ。

けれど、蛇に睨まれたカエルにも意地がある。

僕は逃げずに八田の兄と対峙する。

逃げたくとも足が動かないだけであるが、それでも僕は必死に八

田の兄を睨みつける。

「止めてください！」

僕らの間を割って入った人物がいた。

桐嶋老人だ。

悲痛な叫びは続く。

「どんな事情があれ、俊佑坊ちやまを撃ったのは私です。責めるのなら、どうか冬馬坊ちやまではなくこの私を。私がもつとしっかりしていれば、こんな事には」

桐嶋老人は泣いていた。

確かに八田を撃ったのは桐嶋老人であるが、憎むべき相手は別にいる。

元凶たる男は涙を見ても眉根一つ動かない。

「さつきも言った通り悪いのは私だ。桐嶋さんは気にしないでいい。それよりも桐嶋さん、悪いが彼女を運んでくれないか」

「・・・分かりました。そんなことであればいくらでも」

近づく桐嶋老人にとっさに声を発する。

「触るな！人殺し！」

僕のその言葉に桐嶋老人はびくりと動きを止めた。

僕は八田の兄を睨みつけたまま神谷さんの元へ寄る。

途中カラスが翼をはためかせる。

僕はびくりとし、その様子を見て八田の兄は笑ってみせた。

握った拳はきつと彼には届かないだろう。

そして彼女を背負い、山道を下りる。

「くそつ、くそつ、くそお・・・」

あまりにも無力な自分を呪い、まるで逃げるようでカッコ悪い自分を卑下し、神谷さんを守るためだと自分の行動を正当化しようとしている自分に嫌気がさす。

背中の中谷さんはまだ意識が戻らない。

重心は安定せず、僕は無理な体勢で山道を下りていく。

そのせいで実際の神谷さんの体重より重く感じる。

意識を失った人間がこんなにも重いなんて思わなかった。

人の命が。

こんなにも重いなんて思わなかった。

エピソード

墓の前には先客があった。

「神谷さん、先に来てたんだね」

「うん」

もう既にきれいにされた墓には、花や線香が供えられていた。

その墓の前にちょこんとしゃがんだ神谷さんが手を合わせていた。僕は持ってきた生前加藤があまり飲めなかった酒を墓にかけてやる。

きつと下戸の加藤の事であろう、あの世で気持ち悪くなって顔が青ざめているかもしれない。

そして、僕は静かに手を合わせた。

あれから僕はすぐにでも警察に行くつもりだった。

けれど、僕は結局警察に行ってはいない。

それは必然か、偶然か、僕が警察署に一步踏み入れようとした瞬間、カラスが一声鳴いた。

すると僕の体は暗示が掛かっているように震えだし、動けなくなつた。

当然不審に思われ警察官に話しかけられる。

事件について語るべきである。

そう思うも、警察は信じてくれなかったという八田の兄の言葉を思い出し、言葉はのどのあたりでうごめいていた。

カラスを操る男がいて・・・なんて事を言ったら信じるだろうか。それが冷静に考えるとひどくファンタジーなあり得ない事がよく分かった。

僕は頭のおかしい人間として扱われてしまうだろうか。

そう思うと怖かった。

結局『何でもないです』と逃げ帰ってしまった。

それから何度か警察署に足を運んだが、その度に震えが走った。

もちろん警察署の前に行くといつもカラスが鳴く訳ではない。

けれど、一度僕の中にこびりついた恐怖心は簡単には拭いきれるものでもなかった。

「ねえ、名取君。加藤君と八田君は私達のこと恨んでいるかな？」

「どうだろう。加藤の家に行ったときに僕も同じような事を考えたけれど・・・」

僕らはその後加藤に家にも行つた。

加藤の死の事情を話すためだ。

正直どんな罵詈雑言を浴びせられるのかと内心びくびくしていたが、加藤の両親はそんな言葉一つももらさなかった。

それどころか『大変だったでしょ』『怖い思いをさせたね』『もう大丈夫』と優しい言葉をかけてくれた。

僕はいたたまれなく、どうせなら恨んでくれた方がどんなに楽だろうと思うも、すぐにその思考を止める。

また僕は自分のことしか考えてないと気がついたからだ。

どんな気持ちで加藤の両親がその言葉を僕らにかけてくれているのか、そんな風に頭を切り替えることにした。

今回の事がある前ならもつと僕は自己中心的な考えだったろう。

加藤の死が、八田の死が僕の中を少し変えた。

それはきつと誰かが死ななければ変わらないような代物ではないだろう。

しかし、例えば些細な変化であつたとしても加藤や八田の死が無意味なものにはしたくはなかった。

「きつと恨んでいないよ。もし僕が彼らの立場ならそうだから」

「名取君は強いね。私ならきつと恨んでいる。私、名取君を怨んだ時期も一時あつたし」

「そうなんだ」

「うん」

不意にカラスが鳴く。

「大丈夫？名取君」

僕はやはり震えていた。

「ああ、大丈夫。これでも少しましになったんだけどね。でも、ここじゃやっぱり落ち着かないかな。少し場所を変えようか？神谷さん」

僕はしやがみこんでいた神谷さんに手を差し出す。

神谷さんは少し困った顔をして、首を振る。

「私はカラスはそんなに怖くないけど、そっちはまだ怖いかな。手をつないでいると、自分の事を相手に全て委ねてしまいそうで怖い。多分私がもつと自立した人間ならそんな事はないんだろうけど、結構難しいんだよね。これが」

神谷さんは力なく笑い、自力で立ち上がる。

「あの時私がもつと自分を持った人間だったなら、名取君や八田君を止められたかもしれない」

ぼつりとつぶやく彼女に僕は何も声をかけてやる事が出来なかった。

「また来るよ。加藤」

僕は墓に別れを告げ、青空を見上げる。

カラスはどこか遠くを見ていた。

エピローグ（後書き）

これでこの物語はお終いです。
ここまで読んでくださった皆様に、感謝と謝罪を。
ありがとうございました。
すみませんでした。

おまけ

「見送りに行かなくていいの？冬馬」

「構わない」

家の外では車のエンジン音が鳴っている。

名取達が乗って来て置き去りにされ、桐嶋が探し出してきた車である。

その車内には冬馬の弟、俊介の姿はない。

「それにしても俊佑も慌しい子よね。ようやく家に帰って来たと思つたらもう戻るだなんて。でも、加藤君の事もあつたし、仕様がな いと言えば仕様がな いけれど。忘れもの取りに帰ってきたなら、一言挨拶していいいいのに」

「そうだね」

冬馬はコップに水を注ぎ、渴いた口に含む。

まるで泥でも食んだように口の中がざらざらとしていた。

「忘れものってそんなに大事なものであったのかしら。なんなら送つてあげたのにねえ」

「さあ？私は知らない」

一気に水を飲み干し、二杯目を注ぐ。

「あら、冬馬。具合悪いの？いつにも増して無愛想よ」

「そんな事はない」

「寂しいのかしら？」

口に運ぼうとしたコップがカタンと音を立て、テーブルを叩く。

冬馬は母の言葉に眉根を歪め、眉間にしわを寄せた。

「・・・違う」

刺々しい視線も柔和な母の笑顔の前では意味を成さない。

「だったら俊佑と喧嘩でもしたの？」

「していない」

その言葉は本当だ。

冬馬は俊佑と喧嘩などしていない。

久しぶりに会った事への気恥ずかしさはあったものの、以前と変わらない仲のいい関係だった。

仲の良い兄弟。

喧嘩など本当に数えるほどしかしていない。

けれど、もう少し世間の兄弟の様に喧嘩していても良かったかなと少し冬馬は思う。

もうこれから先は喧嘩することなど無いのだから。

「だって冬馬、楽しみにしてたでしょ。俊佑が来るの」

その母の言葉には答えず、冬馬は無言でその場を後にしようと障子戸を開ける。

「でも、もう少ししたら俊佑もこの家に戻ってくるから。あまり気にすることも無いかしらね」

ピシヤリと戸が閉まり、冬馬は天を仰ぐ。

「そうだね。母さんと。私と。弟と。桐嶋さんと。一緒に。楽しく・・一緒に暮らせる・・もうすぐ」

ゆっくりと自分に言い聞かせるような言葉。

冬馬は込み上げてくるものに目頭を押さえた。

「もう、泣くくらいならちゃんと見送りに行きなさい。ホント、冬馬は意地っ張りなのだから」

障子戸の向こうから八田の母の声が冬馬にかけられる。

呆れた様な、温かな優しい声。

真実を知ったなら、この声はまたあの涙声に変わってしまうのだろうか。

八田冬馬は顔を覆い、全てを覆いかくそうとする。

けれど、涙は、声は指と指の隙間から漏れ出るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782j/>

鴉は紅く、黄昏を待つ

2010年10月8日13時52分発行